The reexamination of late medieval Japan’s monetary history : The aspect of local history and Asian history

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/42249

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

様式　7（Form 7）

学　位　論　文　要　旨
Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

中世後期日本貨幣史の再構築－地方史とアジア史の観点から－

（和訳または英訳） Japanese or English Translation

The reexamination of late medieval Japan's monetary history

: The aspect of local history and Asian history

人間社会環境学　専　攻（Division）

氏　　名（Name）　小早川　裕悟

主任指導教員氏名（Primary Supervisor）　弁納　才一

（注）学位論文要旨の表紙
Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

英文要旨

This thesis is aimed for the rebuilding of currency circumstances of the Japanese latter part of the Middle Ages. I adopted a method to let history and an archeological point of view fuse to achieve this purpose. And I clarified the currency circumstances about the region of Japan (Hokuriku and Shikoku, Tohoku regions) and connection through the currency with Japan and Asia such as Fujian or Vietnam by using the method of this study.

As the result of this study, it can prove that the currency circumstances about the region of Japan are different from that of Kyoto. Particularly, the people of the Hokuriku region and the Shikoku region received coins removed from Kyoto. However, the people of the Tohoku region constructed the original currency circumstance because they made the money-based economy by the trade with the people in southern Hokkaido.

And there are some common features between Japan and Asia such as Fujian or Vietnam. In other words, the money-based economic zone in Asia around China was organized and it included Japan. I can indicate that the currency circumstances about the region of Japan had constructed the original currency circumstances in the context of the Japanese latter part of the Middle Ages.

和文要旨

本学位論文は、15・16 世紀を中心とする中世後期日本貨幣史の再構築を行うことを目的としている。これまでの中世日本貨幣史は、文献史料が多く残されている京都・堺・博多などといった西日本の中世主要都市の通貨事情を中心に論じられてきたが、文献史料が少ない地方の通貨事情については研究対象外とされてきた。そのため、これら西日本の通貨事情を中世日本の通貨事情として扱ってきたという貨幣史上の問題点が存在している。

この問題点を解決するために、本学位論文ではこれまで別々に論じられてきた文献史料による文献史学と遺跡から発掘された出土銭貨による考古学の観点を融合するという新たな研究手法を採用した。両者の融合により、文献史学からは通貨事情の変遷を、考古学からは流通銭の実態というこれまでの先行研究では成し得なかった中世後期日本の地方における通貨事情の実態解明を行っていく。

さらに、中国銭の鋳造拠点であり、一大交易拠点として機能していた中国福建省や日本とともに中国銭が流通していたベトナムについても注目する。この日本だけにはとどまらない観点を導入することで、一国史や東アジア史にはとどまらないアジア全域を対象とした研究視角を中世後期日本貨幣史にもたらす。

以上の研究手法により、中世後期日本貨幣史の再構築を行っていくこととする。以下、本学位論文にて明らかにした内容をまとめておきたい。なお、第 1 章は、通説に基づいた日本・中国の通貨事情を概観した内容であるため、ここでは割愛した。

第 2 章では、年貢帳簿である散用状の記載を網羅し、データベース化することにより、銭貨が持つ重要な機能の 1 つである和市（物価変動）について述べた。ここでは特に、播磨国矢野荘（現在の兵庫県相生市）における米だけではない畠作物も含む和市に着目することとした。

和市の変遷については、年毎だけではなく、月毎の変遷をグラフにて示すことで、和市が収穫時期や天災に左右される農作物の収穫量と連動性を持っていることを明らかにした。さらに、代官らは自らの私腹を肥やすために、換金時期を意図的に変えていたとする和市を利用した経済行為があったことを示した。

中世日本の和市は、基本的には需要と供給のバランスに基づき、さらに市にて寺社の使いである上使・在地の責任者である代官・搾取される百姓の立会いの下で調整・決定されていた。また、在地での農事暦や収穫量、天災、一揆などもまた和市を形成する一因とな

っていた。この和市と通貨事情は密接な関係にあったといえる。具体的には、播磨国矢野荘における 15 世紀代中頃の和市は、西日本において悪銭が拡大し、市での取引に影響が生じ始めた時期と合致する。つまり、悪銭が拡大すると市場では悪銭を排除する撰銭が行われるようになったことで、市にて使用可能な銭貨が減少し、結果として和市も下落したという流れが導き出されるのである。

以上のように、和市は銭貨が持つ重要な機能であると同時に、当該地域における銭貨の流通状況を読み解くための 1 つの手段として利用できるといえよう。

第 3 章以降、地方の通貨事情について言及していく。まず、北陸地方の通貨事情について述べることとする。北陸地方に関しても、中国銭を中心とする貨幣は流通しており、15 世紀末には悪銭も流通していた。悪銭が年貢銭内に登場し始めた当初は、中世主要都市と同様に、代官などの権力者層は悪銭を排除していた。しかし、悪銭が拡大するにつれて、その対応は悪銭を精銭へと交換する買い換えへと変遷し、最終的には悪銭を受容するに至った。しかし、北陸の在地では悪銭が登場した当初より、悪銭に対する基準が京都よりも緩く設定されていたため、中世主要都市では忌避されていた明銭を含む精銭と無文銭を除く悪銭とを混用する通貨事情が日常遣いの場面において構築されていた。

特に、1570 年代になると、銭貨には北宋銭と京都では忌避の対象であった明銭で構成される精銭の「古銭」・模鋳銭などで構成される悪銭の「次銭」による京都での 4 層の階層化よりもシンプルな階層化が形成していた。同時期には、金に貨幣機能が備わるようになり、中世後期北陸の通貨事情における画期は 1570 年代であったと指摘できる。この金・銭は、高額貨幣・低額貨幣としてすみ分けがなされていたため、両者は併存し、機能していた。そして、1590 年代末に銀が登場することにより、これまで金・銭により記載されていた取引が銀建てへと急激に変わっていった。つまり、金・銭の貨幣としての機能が銀により一挙に吸収されることとなったのである。

次に、第 4 章では四国地方について述べた。四国地方では、金・銀に比べ、銭貨流通が充実していた状況にあった。考古学上においても、14 世紀代より大量の銭貨が流通していたことを裏付けることができた。しかし、流通銭内には模鋳銭などの悪銭に相当する銭貨も流通していた。これらの悪銭に対しては、西日本の中世主要都市と同時期に悪銭を排除する撰銭が行われ、京都と似た通貨事情が形成されていたといえる。しかし、銭貨の階層化については、極端に遅れることとなり、1580 年代以降になると、ようやく北宋銭・明銭を精銭とした「古銭」と精銭の 2 分の 1 程度の価値しかなかった悪銭である「上銭」で構

成される階層化が確認されるようになった。

金・銀については、上述の通り、四国地方の通貨事情が銭貨に依存していたこともあってか、これらの流通は贈答用の機能が優先され、貨幣機能が備わるまでには京都よりもかなりの時間を要した。これら金・銀・銭の三貨は、すみ分けをしていなかったといえる。つまり、中世後期四国において、金・銀は補助貨幣的な役割を担う程度に過ぎなかったのである。この状況は、1590 年代に銀が貨幣機能を備えるまで続いていたものと考えられる。

そして、第 5 章において東北地方の通貨事情を確認する。東北地方は、中世主要都市ではなく、道南との交易関係により銭貨経済が形成されたという他地域とは異なる環境にあった。そのためか東北地方における銭貨経済の本格的な形成は、他地域と同様に鎌倉末期頃であった。この頃から東北地方では、全ての流通銭を 1 枚 1 文として同価値通用の原則を維持し、他地域では真っ先に悪銭とみなされていた無文銭・模鋳銭を流通銭の一種として機能させていた。この状況は、基本的には江戸期における寛永通宝の統一まで継続したといえ、流通銭内に悪銭が含まれているという概念そのものが東北地方では希薄であったことが示されている。そして、16 世紀末になると、豊臣政権が強制的に明銭の永楽通寶を精銭とする方針を打ち出したが、年貢銭のみに限定されてしまい、あくまで在地間での取引では無文銭・模鋳銭も他の中国銭と同様に使用していたとする状況からは変化しなかったといえる。

金については、古代から産出があり、畿内などへと移出していたため、金は早くから流通していた。金と銭は北陸地方と同様に、贈答用としての高額貨幣と低額貨幣にすみ分けし、併存していたといえる。そして、1590 年代からは年貢としても金が利用されるようになり、金に貨幣機能が備わることとなった。この貨幣機能化は、1590 年代以降に金山の開発が本格化したことに端を発し、産出量が増大したことにより派生したものといえる。

一方、銀は流通そのものが中世後期までそれほど進展せず、金・銭の補助貨幣として用いられるに過ぎなかったと指摘することができる。そのため、銀の貨幣化も進行せず、東北地方における銀遣いの本格化は、江戸期まで待つしかなかった。

最後に、第 6 章にて福建省・ベトナムというアジア的観点から中世日本貨幣史を捉えておく。まず、福建省については、文献史料上、中世の日本人商人が福建省沿岸部を出入りし、福建製偽銭（私鋳銭）を買い求めていたとする記録が残されている。さらに、出土銭貨上においても、福建製偽銭の銭種が日本で確認された出土銭貨の発見枚数の上位に位置している。これらから、無文銭・模鋳銭を銭貨の中心としていた東北地方を除く地方は、

正規の中国銭とともに福建製偽銭も精銭として使用していたといえ、銭貨を介して福建省の影響下にあったと指摘できる。

また、ベトナムについては、自国で鋳造された銭貨がありながら、日本と同様に、中国銭を精銭として利用していたことが出土銭貨の観点から読み取れる。さらに、銭貨の構成についても、日本と非常に酷似したものとなっている。この日本とベトナムにみられる共通点は、16 世紀まで確認することができた。16 世紀以降になると、両者には違いが生じ、日本が朝貢貿易での下賜銭である永楽通寶が増大する一方で、ベトナムではこれまで精銭の主体を担っていた北宋銭の銭銘の一部を加工した銭貨が登場し始める。ベトナムでの北宋銭の加工は、日本では確認されないため、ベトナム独自の特徴の 1 つとして挙げることができる。

以上のように、中国銭を用いていた日本とベトナムは、それぞれ共通する連関性を持ちながら、時代が経るに従って、独自性が創出されていったことが理解されるであろう。

このように、中世後期日本においては、政治・経済の中心地であった京都などの西日本の都市を中心に通貨事情が形成され、他地域にも貨幣がもたらされることで、貨幣経済圏を拡大していった。しかし、この貨幣経済圏の形成は、京都に近くあればあるほど通貨の流通量や質は充実し、逆に離れれば離れるほど流通量や質は京都との距離に比例して乏しくなっていくという偏った状況を引き起こした。

そして、地方では、撰銭行為により京都からこぼれ落ちてくる悪銭や私鋳銭を受容することで貨幣経済圏を維持し、代銭納などの取引を可能にしていたのである。つまり、中世日本貨幣史上において、地方は京都の受け皿的役割を担っていたといえよう。この役割は、京都から遠方であればあるほど薄れていき、地方毎の独自性が創出されやすくなっていく。地方は、それぞれの貨幣経済の実情に沿った通貨事情を実際に構築していくこととなったのである。

ただし、東北地方については例外であり、前述したように東北地方の貨幣経済は京都との関係性からではなく、道南との交易関係をきっかけに形成されたものであった。よって、東北地方の通貨事情は、16 世紀末の豊臣政権の介入までは京都の受け皿的役割を担ってはいなかったといえる。つまり、東北地方は東北独自の通貨事情を形成しており、無文銭流通などの東北にしかみられない独自性を生み出していったのである。

中世後期日本貨幣史は、従来のように一元的に語ることのできるような状況ではなく、京都との位置関係、在地の状況、通貨流通量、金・銀・銭の連関性といった多岐に及ぶ要

因が複雑に絡まり合うことにより生み出された柔軟性のあるものとして捉えられなければならない。

また、中世後期日本の通貨事情は、銭貨を介すことにより日本一国や東アジアにも留まらない、日本からベトナムまでのアジア的枠組みの中に内包されていた。この枠組みは、福建省という一大交易拠点の存在が最大の要因であったといえる。具体的には、日本は、中国から中国王朝の公鋳銭と福建製私鋳銭といった中国銭、ベトナムよりベトナム銭の影響も受けていた。そして、ベトナムは自国銭よりも中国銭に重点を置いた通貨事情を形成していた。つまり、日本・ベトナムまでをも含むアジア圏において、中国銭を基軸通貨として扱うことで中国が主導権を握る「アジア貨幣経済圏」が成立し、経済面における影響を及ぼしていた。

この点を日本側からの視点から捉えると、「アジア貨幣経済圏」に内包されると同時に、日本国内の京都を中心にした貨幣経済圏が同時に存在していたことに気付く。つまり、アジアと日本国内という大小二重の貨幣経済圏が中世日本には形成されていたと指摘できる。そして、両者の円の周辺に位置していた中世日本の地方は、中国や京都からはそれほどまでに強い影響下には置かれなかったため、独自性を生み出すことができ、地方毎に異なる通貨事情が形成されていくこととなったのである。

以上が、本学位論文における筆者の見解である。本学位論文では言及できなかった課題が散見されるため、本学位論文をもって中世後期日本貨幣史の全体を再構築できなかったことは否めない。今後においては、本学位論文において挙げた課題を解決し、その上で、15・16 世紀において東南アジアに進出してきた西洋諸国との関係性に着目し、西洋銀と中国銭の連関性に言及することで、世界史上における中国銭の位置付けを示していきたい。

学位論文審査報告書

平成２７年　２　月　２　日

１　論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専　攻　　人間社会環境学専攻

氏　名　　小早川 裕悟

２　学位論文題目（外国語の場合は，和訳を付記すること。）

中世後期日本貨幣史の再構築－地方史とアジア史の観点から－

３　審査結果

判　　定（いずれかに○印）　（合 格）・　不合格

授与学位（いずれかに○印）　博士（ 社会環境学・文学・法学・（経済学）・学術 ）

４　学位論文審査委員

委員長　　弁納 才一

委　員　　鶴園 裕

委　員　　古畑 徹

委　員　　小林 信介

委　員　　黒田 智

委　員

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5　論文審査の結果の要旨

本学位論文では、15・16 世紀を中心とする中世後期日本貨幣史像を再構築することを目的として分析・考察が行われている。各章の概要は以下のとおりである。

第１章では、当該時期、日本では中国の通貨が流通していたことから、日本と中国の通貨（銅銭）事情についてその両国の通貨事情の連関性も含めて概観している。第２章では、播磨国矢野荘（兵庫県）における和市と散用状について分析し、米・麦の物価変動が基本的には需要と供給のバランスに基づいていたことを明らかにした。第３章から第５章では、京都を中心とする日本通貨経済圏の周辺に位置する北陸・四国・東北の通貨事情について分析し、京都で悪銭とされた貨幣が地方では精銭として扱われるなど、京都とは異なる特徴が見られ、特に東北北部ではむしろ道南との経済的結びつきが強かったことが指摘されている。第６章では、中国福建省とベトナムの通貨事情に関する分析から、日本との連関性とともに、日本とベトナムには中国銭を精銭として使用するという共通点もあったことを明らかにした。

以上の分析・考察から、中国を中心とするアジア通貨経済圏と京都を中心とする日本通貨経済圏という大小二重の通貨経済圏が中世日本で形成されていたとの結論を得るに至った。

本学位論文は、文献資料に基づく実証史学と出土銭貨に関する考古学の成果を融合させるという研究手法を用いた点に特長があり、また、日本史という一国史的分析枠組みを超えて、東アジアという枠組みの中に位置付けようとした点に斬新さが見られる。

もちろん、本人が自覚しているように、本学位論文にはなお多くの課題が残されている。すなわち、文献資料の解釈には厳格さが求められるべき部分もあり、中世後期という時期区分や専門外の分野に関する知識・認識にもやや甘さが見られる。また、中国（福建省）とベトナムについては分析が行われたが、琉球・朝鮮については本格的に言及することができず、日本国内では北海道・関東・東海・九州が分析対象から除外されている。さらに、中国を中心とするアジア貨幣経済圏と京都を中心とする日本貨幣経済圏の二重構造がいかなる実態・動態を有していたのかは明確には示されていない。

しかし、以上の課題は、主要には分析枠組みの斬新さによるものであり、また、研究のより一層の広がりと進化の可能性を示しているのであって、本学位論文の学術的価値の高さを何ら引き下げるものではない。

よって、本学位論文審査委員は、本学位論文が博士学位を授与するに十分な水準に達していると全員一致で認めることとなった。